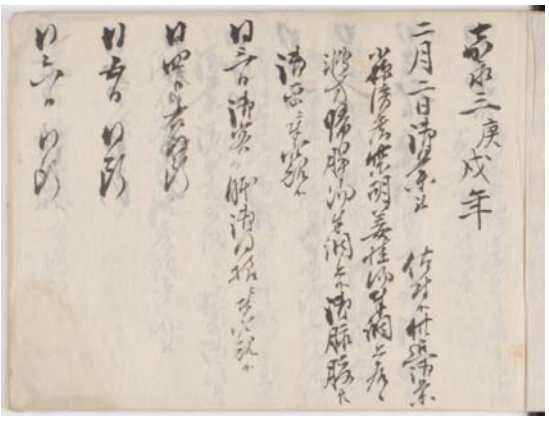
展示資料解説目録

１．河村家文書と医療器具

◇文書



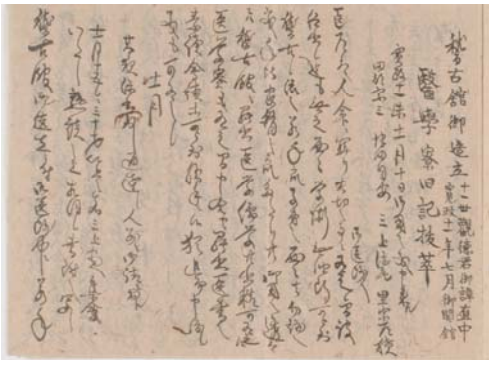
嘉永三庚戌年
二月二日御薬被　仰付候、此迄御薬
小懸清庵紫胡姜桂湯奉調上居候、
転方帰脾湯奉調上候、御脉腹共
御平ニ奉窺候
同三日御容　躰御同様ニ奉窺候
同四日右同断
同五日　同断
同六日　同断

殿様御容体日々備忘録

第 12 代藩主井伊直亮（直弼の兄）は病に臥し，1850(嘉永 3)年 9 月に亡くなるが，その間の医師としての記録である。直亮の毎日の病状が克明に記されている。なお，上図の内容を右のように翻刻した（海原亮氏 翻刻)。

留文録

河村純碩・純達二代を中心に，公私にわたる諸事件を，備忘のために書き留めたもの。
弘化 2 年 11 月書付写として「此度御取立被　下置御医師並ニ被　仰付候ニ付，当巳年附此証人ヲ以書付指上申候」との記載がある。1845(弘化 2)年 11 月，藩医に任ぜられたことがわかる。



稽古館古記

本書には彦根藩医学寮の設立当初から幕末期に至る事件，記録が抄録されたと推察される。
彦根藩校・稽古館は 1799(寛政 11)年 7 月 29 日に開設（1830[天保元]年から「弘道館」と改称)，藩医の教育を目指し医学寮が併置された。医学寮は藩医のみを対象とした専門教育施設であると考えられている。

◇医療器具

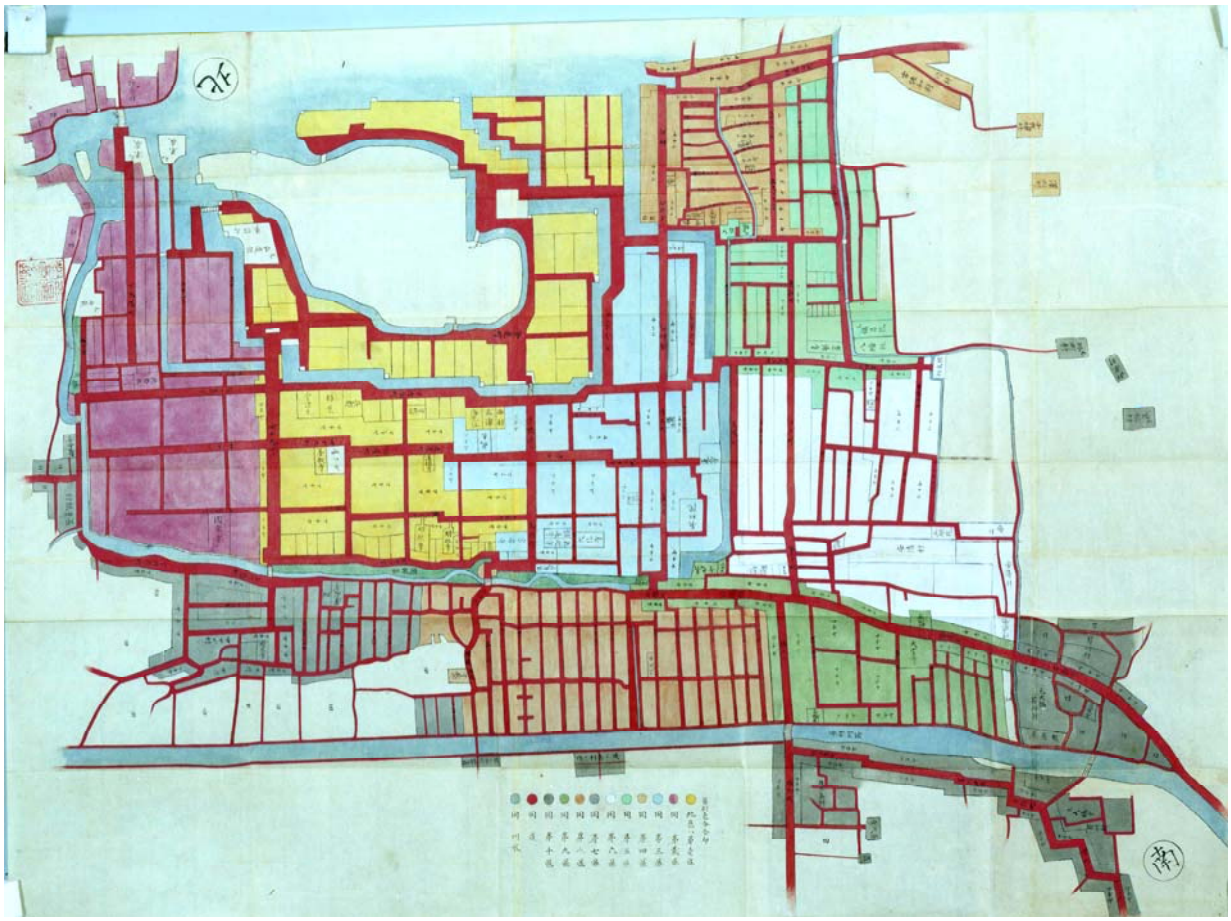
医療箱

この医療箱は参勤交代のような当時の地方政権の要人が長期旅行に際して持参したものと思われる。旅行途中で隊士たちが疾病，外傷にあっても支障のないよう藩医が随行するのが，当時のならわしであった。地方の藩医にとっては江戸の進んだ医学に接するまたとない機会でもあった。この医療箱は，彦根藩医河村家の医師が随行したとき持参したものである。主として薬物が収納されていた。（友吉唯夫名誉教授執筆）

経絡人形

この経絡人形は江戸時代に鍼科講習所等で教材として使用されたものである。徳川綱吉が将軍職につくと，すたれていた鍼術を再興する政策をとった。その頃ちょうど管鍼（くだはり）という独自の方法を考案した杉山和一という針医学の大家があり，全国各地に杉山流鍼科講習所が設けられることとなった。この人形は当時そのような講習所での研修のため，あるいは実際の治療にあたって経絡の分布をたしかめるために用いられたものである。（友吉唯夫名誉教授執筆）

２．彦根の古地図



犬上郡彦根市街全図　手書彩色　（近江国各郡町村絵図）［作成地・作成者不明］ 明治期

１枚　95×70 ㎝　［滋賀県立図書館所蔵］

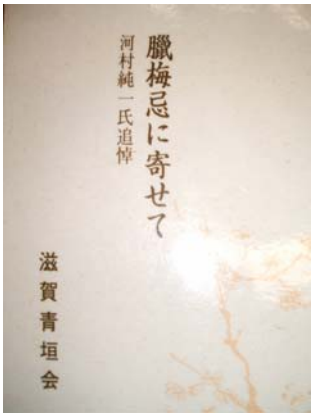
河村家所在地の旧一番町(現在の中央町)が収録されている絵図。

資料紹介

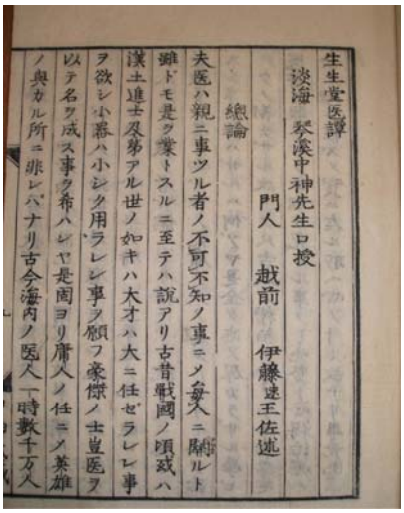
臘梅忌に寄せて　：　河村純一氏追悼

礒崎啓編 1988(昭和 63)　滋賀青垣会

河村文庫資料を寄贈された河村純一先生は歌人として多くの歌を詠まれたという。河村氏の人柄が偲ばれる。脇坂行一・元滋賀医科大学長（故人）の寄稿も掲載されている。本学に河村文庫が寄贈された経緯の一端がわかる。［滋賀県立図書館所蔵］

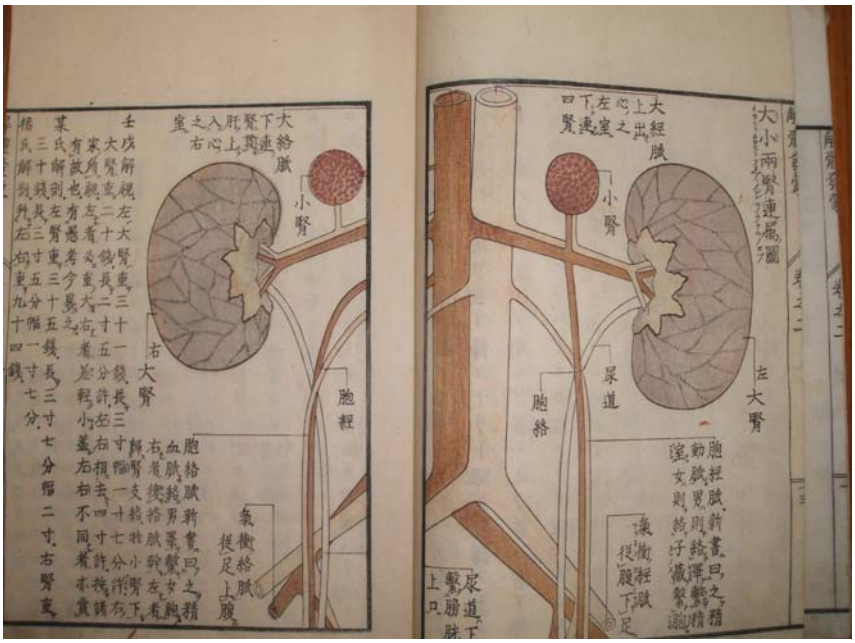


３．近江の医家



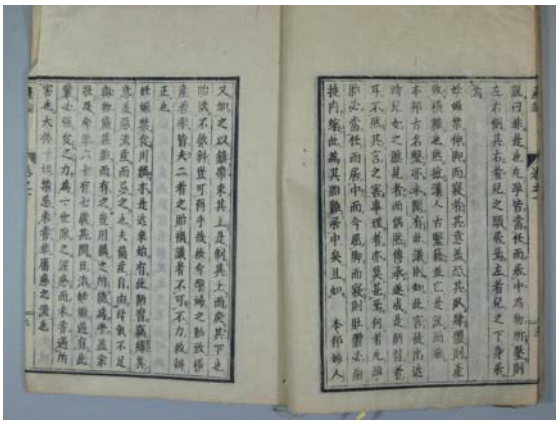
生生堂医譚　中神琴渓著　1795(寛政 7)年　京都・林伊兵衛・刊［滋賀医大・守一堂文庫所蔵］

中神琴渓(1744-1833)は，現在の草津市生まれ。名を孚（まこと），通称右内，字を以隣，琴蹊と号した。通説では，農家の生まれで，大津の医家・中神氏を継いだという。たまたま吉益東洞門の六角重任の『古方便覧』をみて感激し，吉益東洞の著書を熟読し，自ら古医方を身につけたという。48 歳で京都に移り，堺町四条で開業し，大いに繁昌したという。1833(天保 4)年 90 歳にて没。『生生堂医譚』は琴蹊の門人が口述筆記したと思われる書物。「医学をするのは何の為ぞ、疾を癒やすこそ肝要なるべけれ」（左図 2-3 行目参照）この一語は、琴溪にとっての初志でもあり、終局の目的でもあったといわれている。



解体発蒙　三谷公器著　1813(文化 10)年　京都・西村吉兵衛ほか刊

三谷公器(1755-1823)は近江・江北の人。(『近江人物志』は東浅井郡と推定。）儒学に精通し，京都で医業を行った。三谷公器が浅井惟享の協力のもとに著した解剖学書。解剖名など多くの漢字にふりがなのある当時珍しい書物。これにより、当時臓器名がどう呼ばれていたかがわかる。三谷は，1802(享和 2)年京都で死刑囚の解剖を観察，臓腑をスケッチしており、さらに東洋の医学古典、橘南谿の解剖図記や、小石元瑞の死刑囚解剖図，『解体新書』などを参考にして本書を成した。(友吉唯夫名誉教授執筆に加筆)

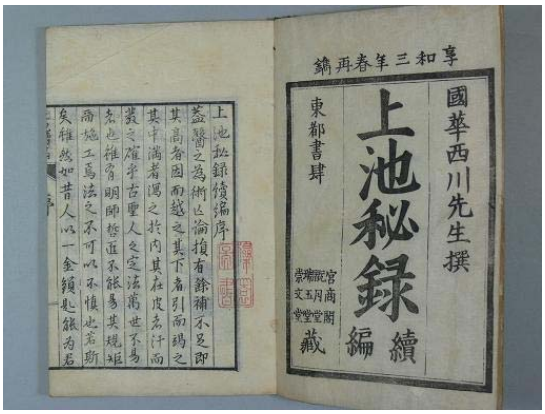


賀川玄悦の墓と賀川玄悦顕彰碑

玉樹寺境内（京都市下京区中堂寺西寺町 17）

子玄子産論　賀川玄悦著　1765(明和 2)年　京都・河南四郎兵衛刊［滋賀県立図書館所蔵］

賀川玄悦(1700-77)は江戸中期の産科医。彦根の出身。字は子玄。薬物療法の及ばない難産に鉄鉤を用いる手術療法を発明した。1765(明和 2)年には，それまでの多くの妊婦についての長年にわたる臨床研究をふまえた独創的な自説を皆川淇園が文章化した『子玄子産論』(単に『産論』ともいう)を刊行して，日本近代産科学の基礎を築いた。



簸揚傷寒論　森下驥著

1821(文政 4)年序　翫翠園蔵板

森下驥(生年不詳-1840)は彦根の医師。彦根藩校・弘道館医学寮の会頭をつとめたこともある。

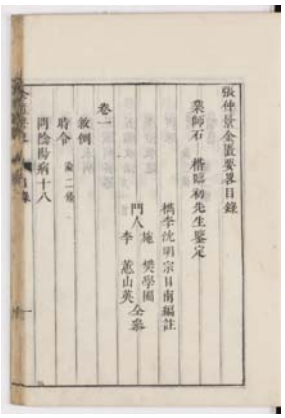
上池秘録　西川国華著

1803(享和 3)年　江戸書林刊［滋賀県立図書館所蔵］

西川国華は儒医。彦根出身。儒学を彦根藩野村東皐に学び，江戸に出て医術を吉田桃源に学び，丹波綾部藩に仕えた。

４．漢方医学から西洋医学へ

◇漢方医学



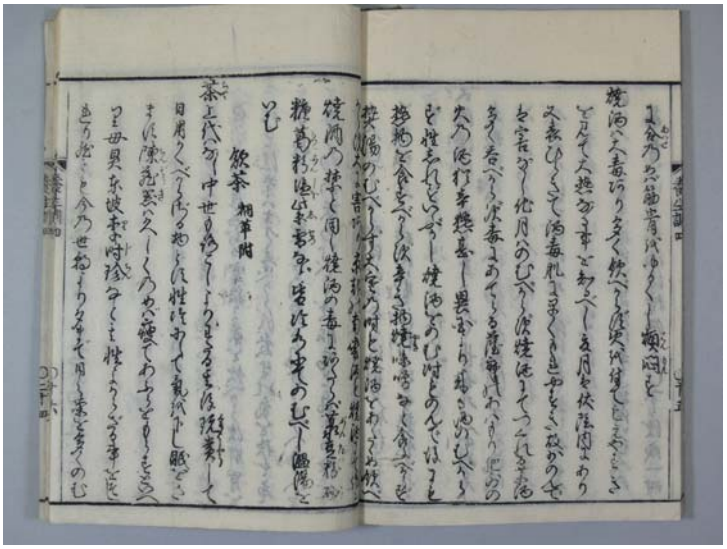
傷寒論
1715(正徳 5)年序　刊記不詳

漢方の基本的聖典として，江戸時代の漢方医の尊崇を受けてきた治方書。通説では，著者は後漢の張仲景。晋の王淑和が註文を入れたとされる。現在伝わっている『傷寒論』は,『傷寒雑病論』のうち，傷寒を扱った 10 巻を王淑和が編纂し直し，更に宋時代，再構成を受けた註本といわれている。傷寒論が我国にもたらされたのは，室町時代後期，坂浄蓮が明本を持ち帰ったのが最初といわれている。傷寒論を系統的に研究したのは，吉益東洞を嚆矢とする。(滋賀医科大学附属図書館報 Library News No.8　1981 石黒達也講師執筆より)

金匱要略
1732(享保 17)年　京都・秋田屋惣兵衛ほか刊

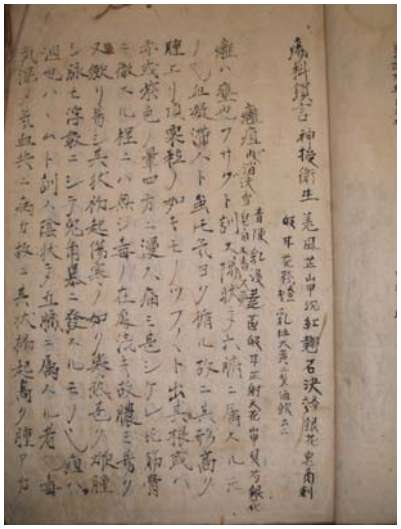
本書も張仲景の著作。『傷寒論』の姉妹編。あらゆる分野の疾病について記している。河村文庫所蔵のものは，江戸時代の翻刻本。

.



養生訓　貝原益軒著　刊記不詳　［滋賀県立図書館所蔵］
貝原益軒は江戸前期の儒者，博物学者，庶民教育家。名は篤信，字は子誠，通称は久兵衛。号は損軒，晩年に益軒と改めた。晩年には『養生訓』『大和俗訓』など多くの教訓書を書いたが，本書前者はみずからの体験に基づくもので，現在にも通じるところが多い。

◇漢方と西洋医学の折衷



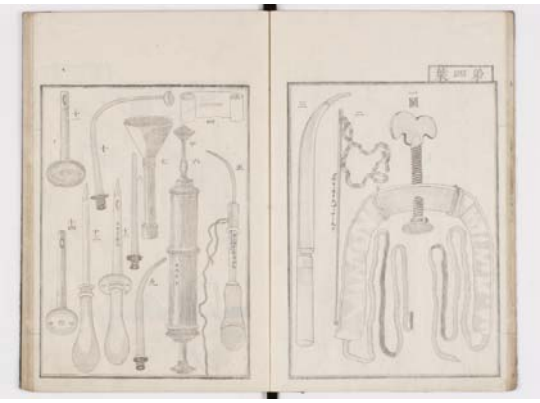
瘍科瑣言　華岡青洲口述　写本

華岡青洲(1760-1835)は生半可な知識によって麻酔を用い，その結果ひきおこされる事故を防ぐため自分の技術を秘伝とした。本書も青洲の口述を門人が記録したもの。肺癌，乳癌，破傷風など多数の疾患について症状と治療法が記載されている。症状の記載は現代医学からみても極めて妥当なものである。治療内容についても末期癌の対症療法は漢方医学が中心であるが，基本的には現代医学に通じるものがある。外科医としての青洲を知りたい方に是非一読をおすすめしたい。(滋賀医科大学附属図書館報さざなみ　No.29　1987 松本治朗助手執筆より)

◇西洋医学の流入

阿蘭持渡軍用外科道具写

この写本の解題には「此治療創痍之器也。蘭人『之伊保留止』嘗齎来干崎陽而用之。近者門人某抬千金以購得焉（後略）」とあるので，P.F. von Siebold(1796-1866)が初めて来日した 1823(文政 6)年に持ち来たった道具を写したものであろう。この中には現在も用いる外科ゾンデが紹介されており，その説明には「此器肉中ニ鉄砲玉入リ候節入口ヨリ入レ玉之有無ヲ探リ又疵口及ヒ深サヲ斗ル道具」とある。(滋賀医科大学附属図書館報 Library News No.3 1979 石黒達也講師執筆より)



瘍科精選図解 Laurenz Heister 著
越邑徳基訳　1820(文政 3)年
名古屋・永楽屋東四郎ほか刊

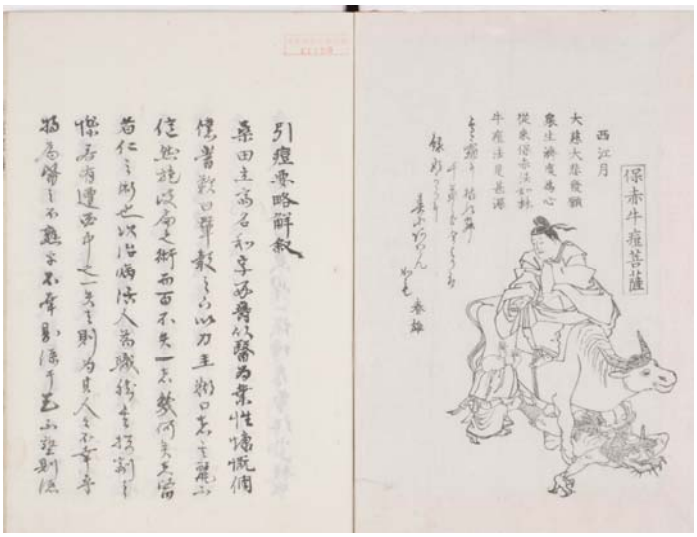
越邑徳基(1784-1826)は伊勢出身、大槻玄沢の門下である。伊勢に帰って、四日市や伊賀の名張に診療所を設けてオランダ医術を普及するとともに、著述に従事した。この Heister の外科書『 Heel Konstige Onderwyzingen』は図が多く、とくに上肢や下肢の切断図がわが国の外科学に与えた影響は大きい。(友吉唯夫名誉教授執筆)

扶氏経験遺訓　扶歇蘭度著　緒方洪庵訳
1857(安政 4)年　適適齊蔵版
大阪・秋田屋太衛門ほか刊

緒方洪庵(1810-1863)が、ベルリン大学内科教授 Christoph Wilhelm Hufeland の『 Enchiridion Medicum 』(1835)の実際編を重訳したもの。西洋医学(内科学）はこれにより大いに普及した。本書はそれまでの訳書に比し数段詳細であり、病因、症候、治療法について明解に叙述してある。ひところ西川義方『内科診療ノ実際』(南山堂、初版 1922）という非常によく読まれた本の末尾に「緒方洪庵翁抄訳扶氏医戒」が掲載され、Hufeland の医学思想は広く日本の医師に知られるところとなった。(友吉唯夫名誉教授執筆)

５．江戸時代の疾病

◇疱瘡（天然痘）



牛痘発蒙　桑田立斎著　　1849(嘉永 2)年序

桑田立斎(1811-1869)は越後の出身。蘭医坪井信道の弟子であったが，1841(天保 12)年，桑田玄真の養子となる。翌1842(天保 13)年，江戸深川に小児科を開業。町医者ながらも種痘に精進し，その普及に尽力した。本書は，1849(嘉永2)年，江戸にもたらされた種痘の接種方法やその効果について論じたもの。扉絵には，牛に乗った牛痘菩薩が疱瘡の悪魔を牛に踏み敷かせ，小児らに慈悲の手をさしのべている図が描かれている。

公命 蝦夷人種痘之図　歌川国貞画

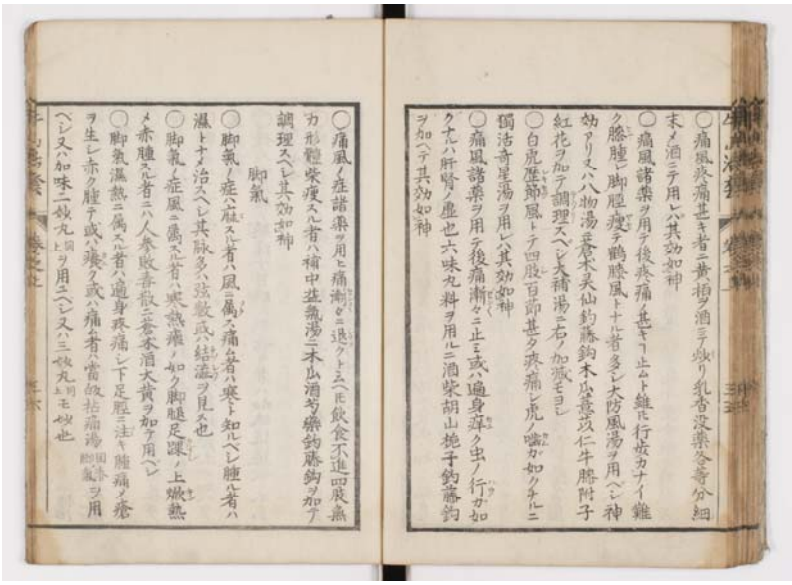
桑田立斎は1857(安政 4)年,幕命により当時天然痘が流行していた蝦夷地（北海道）へ渡って種痘を実施している。本図はもともと，函館の豪商杉浦嘉七がアイヌ画の大家平沢屏山に描かせたもの。その後，歌川国貞が錦絵を描き，江戸で評判になった。図には，100 人あまりのアイヌ人が描かれている。手前の囲炉裏端には裸体となって種痘の順番を待つ者がおり，その上には種痘を終え役人から褒美を受けた者，また無理にも接種の場所へ伴われようとする者など，さまざまな表情があり，大変興味深い。弟子と並んで種痘をする立斎は中央やや右寄りに席を占め，その左には記帳者の姿も見受けられる。立斎の功あって，蝦夷地での痘瘡患者は激減し，その後十数年間大流行をみなかったという。

◇コレラ

コレラ病論　新宮凉民・大村達吉・新宮凉閣訳　1858(安政 5)年　寧壽堂活版

安政のコレラ大流行時に出された専門書。主としてモストの翻訳を中心に，諸家のコレラ論や患者の隔離について著述している。当時コレラは，「コロリ」と呼ばれ（症状が急激に始まり，患者の多くが死亡したため），虎に見立てて「虎列刺」や「虎狼痢」といった漢字を当てた。書名がカナ書きであるのは斬新である。新宮凉民・凉閣はともに新宮凉庭の養子であり，凉民は『虎厲羅記事』二巻を出版し，コレラ予防の薬酒を創案，発表もしている。

◇脚気



牛山活套　香月牛山著　1779(安永 8)年　山本平左衛門ほか刊

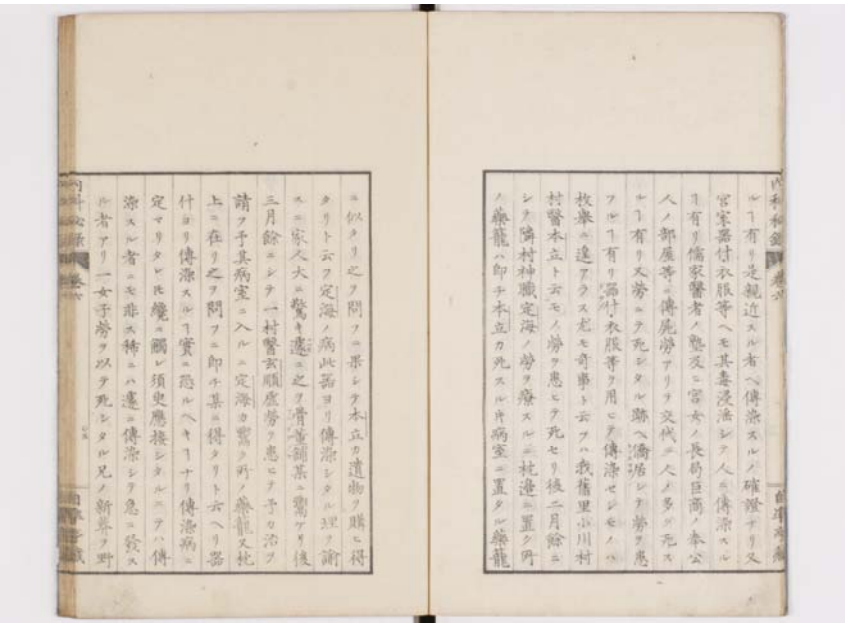
香月牛山(1656-1740)は，筑前の生まれ。名を則実，通称啓益，号を牛山，貞庵，被髪翁と称した。若くして貝原益軒に師事し，儒学と本草学を修めた。『牛山活套』では，病気別に治療法を記す。「脚気」の項では，痛みやむくみ，心筋障害などの症状別に漢方処方が示されている。当時脚気は死に至るとして恐れられ，江戸に住む人に多く見られたことから「江戸煩い」とも呼ばれた。これは都会では精白米に偏した食生活が行われるようになっていたためである。鈴木梅太郎によるビタミンB_1の発見などにより，脚気が栄養障害の一種であることが明らかになるのは，明治も末を待たねばならなかった。

◇乳がん

瘍科秘録　本間棗軒著　1837(天保 8)年序　自準亭蔵版

本間棗軒(1804-1872)は，常陸の生まれ。名を資章，通称玄調，棗軒と号す。漢方医学と西洋医学に通じ，水戸藩校弘道館の医学教授も務めた。華岡青洲に学び，華岡流外科の大成者とされる。 瘍科(外科)を扱う本書では、乳がん(「乳岩」)の治療は切除を第一とし，手術法を記す。青洲流の麻酔薬「麻沸湯」を使った麻酔術法や腋窩リンパ節転移には再発対策として摘出すべきことなども論じられている。

◇結核



内科秘録　本間棗軒著　刊記不詳

本間棗軒は，外科のみならず漢方内科にも深い素養を持っていた。『内科秘録』は医学概論，診察法，解剖学の解説とともに，種々の病に渡って症状や治療法が述べられる。肺結核（「虚労」）については，「労ノ初発ハ咳嗽出デテ久シク止マズ」と咳，「発熱シ寝ルトキハ盗汗多ク出テ」として発熱多汗のように，特徴的な症状を記述する。また，伝染することは当時から知られており，父子兄弟，夫婦，看病者など近しい者の発病や奉公人部屋での集団感染の例を示す。しかし，感染経路として血縁や居室・器物・衣服をあげるように，結核菌の存在が知られていなかった故の記述も見られる。

参照文献

＊pp. 10-19 の資料説明は下記の資料に拠った。

なお　各資料の末尾○印は滋賀県立図書館所蔵，□印は滋賀医科大学所蔵

１．河村家文書と医療器具

『滋賀医科大学古書目録』滋賀医科大学附属図書館 1981　○□

中村直勝編**『彦根市史　中冊』**彦根市 1962（臨川書店 1987 復刻）　○□

岡田慶夫著**『湖国と医人たち』**金芳堂 1993　○□

海原亮「彦根藩医学寮の設立と藩医中・藩医河村氏の記録から」**論集きんせい** 23 号 pp. 43-63 2001

彦根市史編集委員会編**『新修彦根市史　第七巻　史料編　近世二』**2004　○□

海原亮「知識・技術の所有と身分」 **部落問題研究**　176 号 pp. 21-43 2006

３．近江の医家

大塚敬節・矢数道明責任編集**『近世漢方医学書集成　17　中神琴渓』**名著出版 1979　○□

滋賀県教育会編纂**『近江人物志』**復刻版 臨川書店 1986　p. 567“三谷公器”の項目　○

『世界大百科事典 5　改訂版』平凡社 2005 p. 87“賀川玄悦”の項目　○

東京図書出版編**『国史人名大辞典 上』**復刻版 東出版 1997 p. 191“西川国華”の項目　○

市古貞次［ほか］編**『国書人名辞典 第３巻』** 岩波書店 1996 p. 552“西川国華”の項目　○

４．漢方医学から西洋医学へ

石黒達也「河村文庫の概要について」 **滋賀医科大学附属図書館報 Library News**　No. 3 p. 5 1979　□

石黒達也「漢方の基本的聖曲」 **滋賀医科大学附属図書館報 Library News**　No. 8 pp. 9-10 1981　□

小曽戸洋**『漢方の歴史』**大修館書店 1999　○

『世界大百科事典 4　改訂版』平凡社 2005 p. 635“貝原益軒”の項目　○

松本治朗「全身麻酔手術を行った漢蘭折衷の医家」 **滋賀医科大学附属図書館報さざなみ** No. 29 p. 9 1987　□

５．江戸時代の疾病

立川昭二著**『近世病草紙』**（平凡社選書 63）平凡社 1979　○

立川昭二著**『日本人の病歴』**（中公新書 449）中央公論社 1976　○

大塚敬節・矢数道明責任編集**『近世漢方医学書集成　21　本間棗軒　内科秘録(一)』**名著出版 1979　○□

浦上五六著**『愛の種痘医 ： 日本天然痘物語』**（恒和選書 4）恒和出版 1980 ○□

桑田忠親著**『蘭方医桑田立斎の生涯』**（中公文庫）中央公論社 1985　○

酒井シヅ著**『日本疾病史』**放送大学教育振興会 1993　□

秋葉哲生「医人群像－④　本間棗軒」 **漢方医学** Vol. 29 No. 5 p. 239 2005

◎　全般にわたって

富士川游著**『日本疾病史』**第二版 日本医書出版株式会社 1944　○□

富士川游著**『日本医学史』**形成社 1972　□

日本医学史学会編**『図録日本医事文化史料集成 第５巻』** 三一書房 1979　○□

京都府医師会編**『京都の医学史』**本文編　思文閣出版 1980　○□

宗田一著**『図説日本医療文化史』**思文閣出版 1989　○□

杉立義一著**『京の医史跡探訪』**増補版 思文閣出版 1991　○□

友吉唯夫解説　**滋賀医科大学附属図書館 HP 近江医学郷土資料電子文庫電子展示**

http://www.shiga-med.ac.jp/library/med_his/exhibit.html